



「できる・できない」「やる・やらない」

できない理由を忙しさのせいにした時、心がなくなる。
できない理由を歳のせいにした時、人は老いる。
できない理由を誰かのせいにした時、自分が分からなくなる。
できない理由を何かのせいにした時、言い訳が自分に返ってくる。
できない理由を自分のせいにしたとき、できる自分が返ってくる。

フェイスブックでみつけた言葉です。時に感じる多忙感からくる苦しさは、誰もが言葉に言い尽くせないつらさにさいなまれます。「やりなさい」「やらなければならない」ことが、次から次へと押し寄せてきているときにそうです。その結果として、自らやりたいと願っていることや、やる必要があるのにできないことも少なくありません。

そのような日常に追われていることを意識しながらも、あえて「できる・できない」と「やる・やらない」を考えてみました。やはり「できる・できない」は、その根拠が自分自身のことよりも、周囲のことや他者への依存が感じられるような気がします。一方「やる・やらない」は、行動決定の瞬間が自己にあり、意志の強さを問われる印象があります。ここまで来ると「やる・やらない」の方が、自分の意思に基づいたものだから「よい」「正しい」などと正当化されそうです。本当にそうでしょうか。そもそも、わたしたちは周囲との関係があって社会生活を営んでいるわけですから、自己の主張ばかりが前面に出れば、ただの「わがまま」になりかねません。「できる」ことを「やる」「やらない」を正しく判断し行動に移したり、「できない」ことを正しく認識し、必要であれば「できる」への努力をしたりしながら、人間関係や社会関係を築いていくのだと思います。適正な位置関係、よくバランス感覚と言いますが、どちらつかずではなく、ほどよい加減、つまり、「いいかげん」ではなく「良い加減」が肝要です。

今年の夏休みも暑い夏になりそうです。小学校〇年生の夏休みは一度きりです。「長い休みだからこそできること、休みであろうがなかろうがやること。」を意識しながら、子どもたち一人ひとりにとって、記憶に残る休みとなればよいと願っています。

読書のススメ

いま全国の書店に「課題図書」というコーナーがあります。読書感想文を書く時の、推薦図書でもあります。夏休みの定番の宿題として長く続けられているのが、読書と感想文です。子ども達にとって（家庭にとっても）、厄介なのが読書感想文です。読書自体に抵抗を感じる子たちにとっては、さらに感想文まで書くのはなかなかの苦渋です。近年では、生成AIで感想文を書くことが可能になってきていることもあり、今後の大きな課題となりそうです。

そもそも、読書の目的は感想文を書くことではありません。本の世界は、文章や挿絵から、物語の世界を自由に想像できることが読書の魅力の一つです。また、先人の知恵に触れる機会でもあります。本に限らず文字から得ることのできる知識や知恵は、数多くあり、私たちの生活とも切り離すことはできません。

書籍の世界でもデジタル化の変容は見逃せません。デジタル書籍は本を紙の世界から、電子の世界へと姿を変えました。自動読み上げのアプリは、読み聞かせの進化系とも言えます。

今年も酷暑の夏となりそうです。室内でどのように過ごすかということが大きなテーマです。ゲームアプリや動画サイトの時間に使うのではなく、文字をゆったりと追う時間としてはどうでしょうか。